

研究資料

演習林地元部落の生いたち

山添 精三¹⁾

¹⁾ 農学部林学科 林政学教室 (昭和11年9月~昭和46年3月在職)

「編集委員会注」

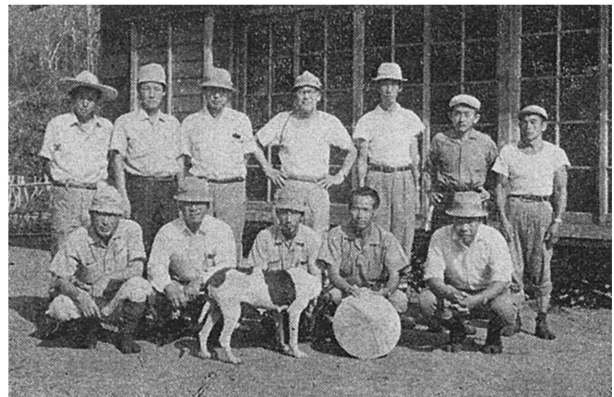
山添精三先生(故)は旧制鹿児島高等農林学校の、そして新制鹿児島大学農学部林学科の林政学教室の教授として35年間(昭和11年9月~昭和46年3月)在職された。その間、演習林長、農学部長などを歴任された。本稿は先生が退官後著された私的な思い出集「清閑雑記」の中に含まれているもので、馬田英隆前演習林教授に紹介していただいた。高隈演習林に関する歴史的資料として貴重なものであるため、今回研究資料として掲載することにした。掲載にあたっては、縦書き漢数字の本文および表を横書き算用数字に変換している。

本稿内に挙げてある六つの地元部落の中で、演習林内部落と高峠部落は消滅して今は無い。馬田英隆先生によれば、7林班にあった演習林の旧建物を取り壊す際に、戦時中に作られたものと思われる「演習林部落報国婦人団」と染め付けられた小皿があったそうである。なお、本稿に関連する資料として演習林報告第1号に山添精三先生・肥後芳尚先生による「高隈演習林における林業労働に関する考察」、第3号に肥後芳尚先生による「山間集落の人口推移について - 演習林地元部落の事例 -」がある。

演習林地元部落の生いたち

この原稿は数年前に書き上げておいたもので、「演習林発展の側面史として」というような副題をつけて、高隈演習林の50年史、あるいは60年史のようなものが刊行される時に寄稿するつもりでおいた。私は在勤中演習林史の編集を再三提案したが、遂に実現を見るに至らなかったため、この機会に原稿の論文調を多少和げて書き直してみた。

高隈演習林は開設以来60年以上の歴史を経たが、その面積の上から見ても、また蓄積の上から見ても、全国大学演習林の中でも優れたものの一つとして数えることができる。本演習林を顧みるとき、その事業の発展、森林の生長は大きく注目せられるであろうが、その間陰にかくれて見落されがちになるのは人の努力、中でも遠い山道を往復し、けわしい山腹に全身の汗を流して立ち働いた労務者の人々のことである。演習林の労務者は演習林内及びその近くの部落に住む人々である。これらの人々は演習林の各種の作業に出没して、得られた賃金収入を生活の足しにした。かれらは演習林内、あるいはその周辺を零細な耕地を持って、暮しをたてている貧しい兼業農家の人が多いのである。開設以来予算の関係で多くの事業を為し得なかった演習林は、かれらに十分な仕事量を供給することのできない憾みはあったが、それでも、かれらは作業に従事して、僅かながらも現金収入を得ることができた。あるいは薪炭林の払下を受けて製炭を営んだ。このようにして、長年にわ



岳野管理所前にて、林学科教官、演習林職員(昭和40年8月)

たって、演習林とかれらは労働力の需要者と供給者という立場で、密接不離の関係を持った。演習林に盛衰の歴史があったように、かれら個人にも、また部落にも幸不幸の運命があっただろう。しかし大局的に見て、演習林の林相は改善され、蓄積は増し、事業も拡大し、目覚ましい発展を遂げた。演習林の管理経営に当たった職員の責任遂行と、その下で労務者として肉体労働に従事した部落の人々の協力を忘れてはならない。しかし大学の歴史編さんに当って、演習林自体の発展は特筆されても、これらの陰の人々の努力はとかく見落されがちになるものである。森の樹々は美事に成長しても、これらの隠れた事実を物語ってくれない。また保存されている書類や台帳の数字の間から、これらの事実をくみとることも容易なことでない。僅かに長年勤め

た職員や部落の古老の炉辺の思い出話から、事実を聴きだすしか方法はない。残る資料もなく、語り伝えも不正確になり、いつとはなく全く知る由もない過去のできごととなってしまうであろう。

演習林の過去を知って、将来の発展を策することは何よりも大切なことである。それと同時に演習林事業遂行に欠くことのできない労働力供給の基地とも言うべき演習林内、あるいは周辺の部落の生いたちや移りかわりを知ることも極めて大事なことと思う。特に林業経営の場合、労働力供給をいわゆる地元部落に期待することが通常であるから、このことは取りも直さず演習林発展の側面史とも言えるだろう。

演習林内及びその周辺の部落をここでは便宜上演習林地元部落と呼ぶこととするが、現在演習林地元部落として挙げられるものは

- (1) 演習林内部落
- (2) 大野
- (3) 高峠
- (4) 岳野
- (5) 高野
- (6) 麓（大字麓の内、宮崎小路、中小路、東小路）

である。

高隅演習林は元鹿兒島大林区署所管の国有林であったが、明治42年鹿兒島高等農林学校開設と同時に、演習林として移管されたものである。その当時は附近部落民の伐採、野火により原野状態、また林相不良の個所も少なかった。しかも大正3年桜島噴火による降灰のため、全山ほとんど緑を見ないまでに被害があったと言われたが、その後漸次林相も回復し、カシ類、シイ、タブ、ツバキ、その他常緑広葉樹が繁茂するようになった。森林調査簿により大正4年当時の林相を見るに、人工林40ヘクタール、天然林1,910ヘクタール（蓄積129, 155立方メートル）、その他1,130ヘクタール（その7割弱が原野、3割弱が伐採地）となっており、その貧弱な林相が推察される。

この頃既に椎木山神には僅かであるが、4、5名の人たち（旧牛根村辺田より清水岫助、清水覚次、前田伊勢太、大野岫助、上村岫熊）が移住しておいて、山林を伐採し、水田、畑を開いた。この人たちが現在の椎木山神の演習林事務所の附近に移住したのは、牛根二川の清水太助氏の談によれば、明治35年頃と言われている。この人は明治43年頃父母と一緒に海岸の部落から椎木山神に定住した祖父と代って入山した。この頃には既に前記の外3名ばかり（牛根辺田から磯脇小次郎、垂水から上村金次郎、森田某）が入植しており、長谷にも2名ばかり（大野市之助、大野蔵之丞）が入っており、この他和歌山県出身の製炭者が入山

しておいた。この当時椎木山神附近はシイの大木がうっ蒼と茂り、深い広葉樹林であった。

このように演習林事務所のある椎木山神附近を中心に、演習林開設以前、あるいはその後漸次移住し、多くは演習林より田畑の貸付を受け、耕作に従事している一群が前掲演習林内部落と呼ばれている集落である。

大野部落は椎木山神事務所より約4キロメートル南にあって、この間道路は開け、交通の便は良い。大正3年桜島大噴火による罹災者が国有林の私下を受け、大正4年4月この地に移住したので、その以前は現在の小学校附近に一戸あった外住民はなく、所々原野があった。移住者は東桜島村22戸、垂水町より61戸、計83戸であった。昭和11年3月20日土地所有権の移転を了しているが、その当時土地面積182町1反5畝16歩、内訳次の通りである。

宅地	5町5反6畝18歩
畑	91.8607
山林	68.6329
防風林	4.4509
原野	5.3310
墓地	0.3214
雑種地	0.0211
道路	5.7404
水路	0.2104
計	182.1516

その後子弟教育のため鹿兒島市へ転出したり、あるいは郷里へ引揚げたものもあって、戸数は減少した。大野原は開墾当時肥沃であったが、年を経るとともに地力の減退を見ている。主として陸稲、雑穀、サツマイモ、アワ、ソバ、大根、茶等を栽培している。畑仕事の外、製炭（最近では止めていると思う。）あるいは道路工事等に従事している。

高峠は戦後開拓政策による入植者として、大野原原野開拓を目的として移住してきたもので、当初大島郡出身の海外引揚者が主体をなし、これに地元入植者が加った。しかし開墾は予定通り進まず、離脱者が多く現われた。現在は大野、林内部落からの入植者たちが主体となって農業を営んでいる。

岳野部落は演習林岳野管理所より約300メートル離れた部落であって、明治20年頃牛根中浜より3名の人たち（西村利三次の兄、今村久右衛門の父、西村重市の祖父）が入植したのが始まりで、当時の模様は不詳であるが、大正3年の桜島爆発の頃には15戸位あったと言われている。爆発の被害のため、何戸かは嚙喉郡へ移住した。戦後開拓によって、新しく4戸（梶ヶ山与作、深港伸次、深港伊太郎、新徳ツネ）が入植したが、他は以前から定住しているものである。

岳野部落の人たちは農業の傍ら、演習林の立木の払下を受けて製炭を行ったが、その後（昭和5年頃）宇都国有林の払下製炭、高隈国有林の官行製炭に従事したが、それらの事業の終了、中止によって、再び演習林の立木の払下を受けて製炭を行うようになった。しかし演習林の造林事業には当初から出役した。

高野部落は演習林最北部に近く、三方山に囲まれた台地であって、農業を主としているが、経営規模の零細なものが多い。

麓部落は鹿児島湾に臨み、桜島と相對している部落であるが、漁業振わず、多く農業に従事している。近年は果樹、蔬菜園芸が盛んである。

以上演習林地元部落の内、林内及び岳野部落について、演習林施業案説明書より戸数、人口等の変遷を見ると次のようである。

年	林内部落		岳野部落		備考
	戸数	人口	戸数	人口	
大正14年	35	153	26	34	岳野部落の大正14年の人口数字は過少で疑問がある。
昭和6年	41	172	34	172	
〃 10年	49	183	37	211	

なお昭和35年10月1日現在国勢調査結果によれば、各部落の世帯数、人口は次の通りである。

部落	林内	大野	高峠	岳野	高野	麓	備考
世帯数	21	63	23	54	36	177	大字麓の内、宮崎小路、中小路、東小路
人口	72	229	102	242	183	662	

これらの部落の人たちは演習林の各種の事業に労務者として労力を提供したが、その主な事業は造林事業である。以前は演習林内は林道が普及していなかったから、造林地までの勾配の強い山道の往復だけでも大した労苦であったと思う。戦時中直営製炭事業が始まり、また近年になって、用材の生産事業が直営で行われるようになった。従って伐木運材にも従事するようになった。なお直営事業の形式をとらないが、払下げ薪炭林によって製炭を行い、演習林の森林更新、また林産物生産によって、演習林事業の実行に貢献した。それはかれら自身の生活のための賃金収入の途であったが、同時に演習林における労働力調達を容易確実にし、演習林の発展に少からず寄与したものと云わなければならない。

以上は演習林地元部落の生いたちの一端であるが、最後に、長年にわたって、演習林事業を支えてきた山村部落の平和と人々の幸せを祈って、この稿を終りたい。

なお本稿をまとめるに当たって、資料の蒐集、事実調査の労を煩わした農学部林政学教室助手肥後芳尚氏に多大の謝意を表する次第である。